

研究課題：「**口腔領域を含む原因不明の疼痛を訴える症例**」

研究分担者 宮岡 等  
所属機関 北里大学医学部精神科学  
(研究協力者 宮地英雄 北里大学)

**[研究要旨]** 口腔領域では顎関節、舌、歯肉などに原因不明の疼痛を認めることがあり、このような症例では、身体各部位の疼痛などとともに、精神的な問題を有することが少なくない。このような症例について性別、年齢、痛みの部位や性状、合併する精神症状や精神疾患などを調査した。慢性疼痛患者においては、それぞれのケースごとに、疼痛が出現する前後で、その持っている情報や経験、思考などが異なるため、受診機転、治療反応性、治療経過も異なっていくことが示唆された。治療対応に際しては、詳細な病歴聴取を行い、そのケースに適切な方法を検討することが重要であると考えた。

### A. 研究目的

北里大学東病院の精神神経科外来にある口腔心身症外来では、口腔内に何らかの症状を持つ患者で、精神的な問題を有する患者を診察治療している。今回この外来を受診している患者について調査することで、慢性疼痛を訴える患者の特徴を見出すことを目的とした。

### B. 研究方法

- 1) 精神科外来にある口腔心身症外来という特殊外来において、慢性疼痛を訴える症例を性別、年齢、痛みの部位や性状、合併する精神症状や精神疾患などを調査し精神症状・治療状況の把握を試みた。
- 2) 1) で得られたデータ、結果について、線維筋痛症症例群と、精神医学的な比較を行い、慢性疼痛患者において、その疼痛の出現部位による相違などを見出すことを試みた。

### C. 研究結果と考察

**1) 精神科特殊外来における、慢性疼痛を訴える症例の精神症状・治療状況の把握：**口腔領域では顎関節、舌、歯肉などに原因不明の疼痛を認めることがあり、このような症例では、身体各部位の疼痛などとともに、精神的な問題を有することが少なくない。このような患者を、症状を呈している部位に関連する身体科 この場合は歯科 の外来のみで診ていくと、患者は精神的な問題も有しているため、治療の進展もうまく進まないことがしばしばみられる。北里大学東病院の精神神経科外来にある口腔心身症外来では、このような口腔内に何らかの症状を持

つ患者で、精神的な問題を持つ患者を診察治療している。この外来を受診している患者を調査し、慢性疼痛を訴える患者の精神医学的特徴を見出すことを試みた。

このような口腔症状と精神症状を診ていく外来は全国的にも数が少なく、「口腔心身症外来」という名称は、大学病院や総合病院の歯科、口腔外科外来内や精神科病院内に歯科医師が開いているものはあるが、精神科外来内に設置されているものは殆どない。北里大学東病院口腔心身症外来は、精神神経科内に設置されている特殊外来である。平成19年4月に開設し現在も継続して、いわゆる口腔心身症の患者の診察治療に当たっている。

今回は、開設時から平成25年12月までに、当外来を受診した患者76例（女性：61例、男性15例）を調査した。

**結果 性別・年齢：**当外来を初診した時の年齢は60歳代の女性が25名と最も多く、平均も62.0歳、中央値65と中高齢の女性に多くみられた。

**結果 主訴：**当外来を受診した口腔関係の主訴は、口腔歯肉痛24名（31.6%）、舌痛16名（21.1%）、口腔内の粘つき・乾燥感12名（15.8%）、歯痛6名（7.9%）、顎運動5名（6.6%）、顎関節痛4名、かみ合わせ4名（各5.3%）、口唇痛3名（3.9%）となっている。口腔領域における痛みに関係する主訴を合わせると53例（69.7%）になる。

以降痛みを主訴とする群（以下OP(+)群）と、主訴が痛みでない群（以下OP(-)群）とで比較しながら示す。

先に示した年齢層は、OP(+)群53例（女性

44名、男性9名)が、初診時平均年齢63.5歳、OP(-)群23例(女性17例、男性6例)は初診時平均年齢60.0歳と、OP(-)群のほうが、若干若かった。

**結果 先行症状：**当外来受診患者は、口腔症状と精神的問題の両方を持ち合わせて経過している。その先行する症状について調べた。口腔症状が先行した例は、OP(+)群では、30/53例(56.6%)であったのに対し、OP(-)群では、7/23例(30.4%)であった。精神症状が先行した例では、OP(+)群ではうつ病が10例(18.9%)と目立った。そのほか両群とも心気障害が多かった(各7例)。

**結果 契機の内容：**契機がはっきりしているケースは、35例(46.1%)と、半数以下であった。契機があるケースでは、OP(+)群では、歯科などの身体治療、OP(-)群では、薬物の影響が多かった。

**結果 紹介元：**OP(+)群では、歯科医師からの紹介が、21/47例(44.7%)、内科・心療内科からが、12/47例(25.5%)であったのに対し、OP(-)群では、精神科(院内・院外合わせて)からの紹介が、11/22例(50.0%)であった。

**結果 病悩期間：**症状が発症してから、当外来を受診するまでの期間を病悩期間とした。全体76例の平均病悩期間は、34.6か月であった。OP(+)群では38.7か月、OP(-)群では21.7か月であった。

**結果 受診医療機関数：**症状が発症してから当外来を受診するまでに受診した医療機関数を調べた。全体76例の平均の受診医療機関数は、3.70箇所であった。OP(+)群では3.83箇所、OP(-)群では3.39箇所であった。

**結果 精神科診断：**当外来を受診した段階で、精神科診断を行った。全体では、心気障害が27例(35.5%)、持続性身体表現性疼痛性障害18例(23.7%)、うつ病14例(18.4%)と、この3診断が大半を占めた。OP(+)群では疼痛性障害18例(34.0%)、心気障害17例(32.1%)、うつ病9例(17.0%)。OP(-)群では心気障害10例(43.5%)、うつ病5例(21.7%)であった。

**2) 線維筋痛症症例群と上記症例群の、精神医学的比較検討：**前年度の当研究で、線維筋痛症のケースを面接し、生活史や経緯などを調査解析している。このケースと今回口腔心身症外来で得られたケースを比較した。線維筋痛症群をFM群とする。

**結果 年齢層：**OP(+)群は60歳代女性、FM群は50歳代女性が多かった。ともに中高年の女性が多い傾向であった。

**結果 先行症状と契機：**OP(+)群では、43.4

%で先行症状が精神症状であったのに対し、FM群では6.2%であった。契機は、OP(+)群は半数以下がはっきりしなかったが、FM群では87.5%に契機があった。共通して目立った契機としては、治療や事故などの身体的侵襲で、OP(+)では、契機がある21例中10例が、FM群では16例中2例がそれにあたる。FM群では仕事が忙しかった、などが契機として多かった(7例)。

**結果 病悩期間：**OP(+)群では38.7か月、FM群では118.0か月と、共に長い期間原因のわからない痛みを抱えるということがわかった。

**3) 全体の考察：**初診時年齢は、中高年の女性が多く、慢性の痛みを有する患者、線維筋痛症患者の年齢分布と一致する。OP(-)のケースとは、口腔内の粘つき、乾燥感や顎運動の異常(顎がガクガクする、位置が一定しない、など)を訴えるケースであり、受診年齢層ではOP(+)群に比べて若干若く、薬剤使用による影響が契機であることが多かった。一方OP(+)群は、契機がはっきりせず、痛みが先行し、病悩期間が長く、受診医療機関数が多い傾向にあった。紹介する経緯についてはそれぞれのケースごとに検討しているわけではないが、OP(+)群では歯科医師からの紹介が多かった。原因のわからない痛みに関して、歯科医師も診断治療に苦慮している可能性がある。精神科疾患は、持続性疼痛性障害、心気障害、うつ病で大半を占めた(83.0%)。

FM群との比較では、契機などの面では若干異なった傾向を認めたが、FM群のケースが少なかったこと、調査方法も異なることから、比較が難しく、考察のできる結論も出せなかった。

## D. 結論

1) 慢性疼痛患者においては、それぞれのケースごとに、疼痛が出現する前後で、その持っている情報や経験、思考などが異なるため、受診機転、治療反応性、治療経過も異なっていくことが示唆された。治療対応に際しては、詳細な病歴聴取を行い、そのケースに適切な方法を検討することが重要であると考え

2) 慢性疼痛患者においては、症状発症の契機に、身体疾患や感染症、侵襲的治療、また仕事や家庭におけるストレスなどが関与することがあることが分かった。

## E. 研究発表

1. 日本疲労学会第9回学術集会；宮地英雄：シンポジウム機能性身体症候群と慢性疲労症候群「精神科医の立場から」2013.6.7

2. 日本線維筋痛症学会第5回学術集会；宮岡等「線維筋痛症の科学性と社会性」2013.10.05

3. 日本線維筋痛症学会第5回学術集会；宮地英雄：シンポジウム口腔領域の痛みに対応するか「精神科医の立場から」 2013.10.06  
宮地英雄 吉田勝也 宮岡等：「線維筋痛症をモデルとした慢性疼痛患者の精神医学的検討」  
2013.9.14

4. 第37回神奈川心身医学会総会・学術集会